

N 「自然」についての雑感

— キイキイと僕たち —

昨年の春、二十代前半の友人が銀座で現代美術のグループ展を開いた。さまざまな素材を使った「ナウイ」作品の中に、明らかに僕らの世代とは異った材質のつかみ方があった。それら海辺でひろい集めたという、波に浸食されすでに丸く摩耗した発泡スチロールは、一見自然石と見誤まる程であったが、彼はこれを工業的材質として使ったのではなく、明らかに“自然”として使っていた。むろん、自然石と錯視することをねらったコンセプチュアル・アートでもなかった。

小学生の頃（昭和30年代中頃）荒川の堤に近い川口に住んでいた。土手の上にあがると川向うの東京には板橋の工場や煙突が見え、こちら側には空高く炎を吹き揚げるキューポラのある鋳工場の屋根があった。一方、自然も豊富で、春にはつくしや菜の花、秋にはすすきの穂もたくさん茂っていた。だが、確実に近代化は進み、時代はまさに高度成長期へと突入して行った。

文房具の中には、甘美な臭いのする消しゴムが下敷や筆箱と並んでプラスチックになった。鉛筆のサックもブリキからプラスチックに变成了。荒川の堤のつくしや菜の花の横にトラックで不法投棄されたゴミの山が散在し始めた。僕たちはその中から、壊された風呂屋のタイルやメカニックな輸血用のビニール管と注射針をちょっぴり性的な興奮を覚えつつ耳を熱くしながらポケットにつめ込み家路へと急いだ。工場と畠の間を抜けている道は、舗装道とじゃり道が地図の鉄道のように交互に続いていた。空地も多く周囲をかこった鉄筋網には風にとばされた週刊紙がひっかかっていた。数年前までクチボソを釣った川には、工場からの廃水が流れ出していた。川辺には、水鳥や亀の足跡はなくなり、バリュームのように重そうな汚水が排出されるのを見て一口「ゴクリ」と飲んでみたくなるような衝動にかられたのも恐らく、それが初めて見る光景だったためかもしれない。

当時、近所に発泡スチロール工場が出来たため、よく川辺にはゴミに混ざって四角く裁断された発

泡スチロールが流れついていた。それを拾い集めてはイカダを組んで遊んだ。小さくかけたものは、学校へ持つて行き、掃除の時、窓に押しつけてこすった。すると「キイキイ」音をたてておもしろいように汚れが落ちた。そこで、ぼくらはそれを“キイキイ”と名付けた。しかし、そのキイキイは決して自然物などではなく、明らかにナウイ材質だった。かつて、停車中のマフラーから出ている排気ガスを鼻をひっつけて嗅ぎ、軽い一酸化炭素中毒になった“ナウイ”感性も今や、黒いチューブインガムをかみ、発泡スチロールの容器の中の無機物にお湯を注ぎ、三分後のラーメンをする現状を前にして当り前の感性になりつつある。今では、ナトリウムやカリウム、カルシウムなどの無機物の入ったスポーツ飲料を何の抵抗もなく口にする世の中になった。

I N S 時代を迎えた社会は「科学的人為は自然の一部」であるとの自覚を強くせまっている。このような状況の下で僕たちのような前近代の材質（漆や木材）を表現へと繋げるには、もはや自然と人工を対峙させる二元論では対応しきれなくなっている。自然の魅力は、非人為であるためではなく、幾重にも重なる複雑なノイズの集積を持つためと考えたい。表現（人工）とはノイズである。つまり既成の秩序から逸脱することが真の表現のあり方である。しかし、人為的ノイズはあまりにも貧しい為、僕たちは何十億年もかけて出来たノイズの集積としての「自然」に畏怖する。自然とは気の遠くなるほど複雑なノイズの集積であり、人為とはより純粹なノイズと言うことになる。つまり宇宙的視野で見るならば自然も人為も「ノイズ」という概念で一括されてしまう。そう考えないと高度成長期前に生まれおちた僕たちやそれ以前の世代の感性には、未来は狂気に満ちた暗黒としてしか映らない。キイキイを自然と重なったものとして感じる感性の中に、かなりきついけれど、明るく楽しい未来への積極的な姿勢を垣間見たような気がする。

(漆芸家)